

江戸文學難語考(二)

穎原退藏

さんこ

この語はすでに文祿伊曾保物語(新村博士)に(校による)

「シヤントの言葉の如くに高聲に叫ばせ、偕其後山呼さんこを鎮めさせて、鶯の仔細を述べた」と見えるが、江戸時代に入つても、伊勢踊四「雪に見よさんこしまつる松のこゑ 念助」とあり、又智恵鑑(萬治三)十「あたりの者共棒ちぎり木をもち出あひける故、二人のぬす人共はさんこをちらし逃げ行き。」出雲の七小町四「此上のあしらひ、尊父の御助言ならでは間馬がきかず圍ひならず、なげねばならぬ小町が館、さんこ亂す少將基」とあるのや、登梯子(寶永二)「是はいごかぬく、鞆が来てさんこみたらに云ひちらす」とあるサンコも同じ言葉と思はれる。而してこの語については合類大

江戸文學難語考(二)

節用集(享保二)九に「潛ヒシム山呼サンコ」として出で、「世俗止

音聲オン所ト言、疑此字乎、今按支那呼チナ爲ニ山呼ニ、是三呼所以爲式也」とあるので語義は明かだが、さうすると智恵鑑以下の用例には一寸あてはまらない。按ふに盛んな勢を失ふといふ意から、「さんくに」といふ程の意に轉用されるに至つたものだらうか。方言として残つてゐる地方があつたら、その用例が知りたい。

さねもり 近松の薩摩歌に「それでは一年五兩か。いかにもく 近年五兩取ります。すればそなたはさねもりぢや、道理で女中の氣に入た」とあるサネモリは謠曲實盛に「近年御領につけられて」とあるのをもちつた洒落たる事はいふまでもなく、夙く紀子大矢數下

にも「ぬれものや六十迄も一さかり、殆實盛諸わけは五兩、潜上や名を横堀のちまたにあげ」としやれてゐる。しかしこの語は又核守と通ずる所から、一般に女の目付役監督係といふやうな義に用ひられて居たと思はれる。傾城伽羅三味線「今こがねをつかねた男を見てもしりめもやらぬ心から、さねもりなしに出あるきます。寛瀾平家二「これも石山詣でと見えて女乗物：供女共五人：六尺八人さねもり二人若男六人供駕二丁老女飼添：上下八十餘人。色道七不思議三「大庄やの内儀どうやら氣のかたの下地：三日目又は五日め御袋はさしあひながら實盛して提重辨當五番目の棧敷に取ちらし」等とあるのは皆その意である。しかもこの語は一時の流行語でなく、長く用ひられたものと見え、安永五年刊の「きゝはつり」に「ぶつかけそはならずして敦盛とは如何、奥家老勤めずして實盛といへるが如し」とある。即ちこの頃は奥女中の取締をする老家老を専ら稱したものでらしい。今日もなほ用ひられてゐるだらうか。

白から杵 同しく薩摩歌に「汗水流して組合ふとて、何やらさゝやき眩いて、互に因果をさらし屋の白から杵とは此事」とある。近松語彙には猥褻な意味としての解があるが、どうも服し難い。といふのは女大名丹前能三「易事ちやがこれ(金)がござらぬといへば、其はわしがさはいしませう、横町の笹屋へいかんせと云。それは白から杵ちや、追つけかね儲けしていひさして出る。曾我鎌倉飛脚「敵をうたんと思ひしに、是はおのゝ手を負はれし、あちらこちらの大明神、杵から白杵の八郎維信」等とあるのによれば、必しも猥褻語とはいへない。今これ以外の用例を知らないし、又この二例ではなほ十分に解し難い。しかし地方的には案外すぐ分る諺ではなからうか。

さそう 源氏烏帽子折に出でゐる語で、藤井博士も註されて居る通り、幼兒の語として諸書に見えるが——例へば海音の三井寺開帳上「今朝出で給ふ其時まで、さそうと愛らしく、いたいけなりしものを」等——その意は分らない。近松語彙には「さ候」の略で「さ

やうに候」の義としてあるが、なほ別解がほしい氣がする。

さくら針 寶船、丹水評「たづねて見えぬ物何、縫ひかけし衣に仇ちるさくら針。」もみち笠(元祿十五)丹水評「あかく成る、手置のわるい櫻針。」同醉月點「まつすぐに、折れて散りけりさくら針。」ちゑ袋(享保五)「ながくと、糸目をかよふさくら針。」水馴棹(不角、寶永二)「心もとなし、縫かけし衣に仇散る櫻針、不閑」等雜俳集に盛んに見える。やはり私の疑問語だが、案外今もちゃんと使つてゐる言葉かもしれぬ。

そびまかふ 日本振袖始二「やあけしからぬ空の雨風鬼どのそびをかはるゝな」のソビヲカフについては、すでに俚言集覽そびくの條に「人をソビクといふは傍牽の義なるべし。又ソビヲカフともいへり、捺字の意也といへり」とあり、近松語彙にも詳説があるから意味は明かだが、實際文獻で見る用例は極めて少い。私は右の外には纔かに風流東鑑一「おのれゝが手は出

しがたく、幸會我の火ふりの牢人我を敵と瘦我を出しねらふと聞て、流石は河津が子程あり、かまへて臆すなうしろづめは我と尻をもつて、厄病の神にて敵とるやらんにて、ひたと十郎にそびをこい(マ、)我にあたまをさせんとする」とあるのが氣づいただけである。これは祐經の詞で、十郎を煽動し誘ひ出すの意である。ソビクは今も多く用ひられてゐるが、このソビヲカフもなほ生きてゐる語だらうか。

たいげん 「かた言」にうつけたる者をいふとあるが、實際の用例は、毛吹草追加「待人やつくりたいげん郭公、義陳」を見ただけである。尤もツクリタイゲンの語は懷子乳母十八、偽の條にあげてあるから、別に獨立した一語と見るべきである。さてそのタイゲンの語源は何であらうか。俳書久留流に「たいげん、一夜分也 灯臺折替であるべし」とあるタイケンには火燭の器らしい。——短檠の訛かとも思はれるが——この語と何か関係はあるまいか。因にいふ愚者をいふ異名は古來頗る多い。これは罵詈雑言の場合にも用ひられる

からであらう。「かた言」には「うつけたる者を鼻毛・たいげん・あやめ・ふんちう・はなだら・あほう・ほれもの等と假初にも云べからず」とあり、久留流、たわけの條には「一、うつけ・あほう・ちやんげ・どん、かやうのものゝ折替ふべし」とある。アヤメ・フンチウ・チャンケ等は何の意味か分らない。二番はすでに醒睡笑鈍副子の條に見えるが、紀三井寺はそれから思ひついてやゝ後に出来た言葉だらう。諸分姥櫻(元祿五)五に「はなげ・うつけ・とりん・とられん・なんびん・のび介・とんてき・北風・かる小判・さきからす・たくらだ・たるい・おもたい・とろ作などゝてけがれたる異名をさづかり」とあるのは、正に馬鹿異名集である。但しこゝに北風とあるのは南風の誤だらうと思ふ。南風はぬるいのでやはり阿呆の異名とされてゐる。御伽名題紙六「昔は傾城が客をたらせしに、今はあちらこちらに成て、少し南風の女郎は客にのぼされ」とあるのはその意である。なほ前記の中ナンヒンは例へば一代女一には難非、當世誰身上三には男賓といふやうに、いろんな字

をあてゝあるが語源は分らぬ。傾城禁短氣にはノンヒンとある。訛つたのである。前にあげたアングウはその後易林本節用集あ部人倫に「暗向」の字を用ひてゐるのに氣づいた。アングラ・アンボンタンなどは今もいふ。南華は色道大鏡に「たはけたる者をいふ」と説明があり、浮世物語・好色貝合等に實際の用例も見える。更に江戸後期にはいろんな言葉が用ひられて居るが、もうこゝらで馬鹿話は切上げよう。だが今日馬鹿の同意語たる方言がどのくらゐあるだらうかといふ事は、興味ある問題にちがひない。

さまざま 東海道名所記四「舟のあしいと遅かりけり乗合の旅人衆これに草臥てあくびさまざまれ、しわがれたる聲打上げてふるめかしき小歌をうたふもあり。」サマダレの語全く解し得ず。

たこからげ 同じく東海道名所記三「濡かたびらをしぼり章魚からげに裾をからげて。」これも分らぬ。

さうやよめり・やしやがよめり 近松の舍利二「いざ亡者を葬送せん。扱も迷ひし死人かな。去ながら

さきの世の迷を此世で治むれば、是から先は此僧か只一すぢに極樂へ引導せん。かた／＼急げやいそげと下知せらるゝ。さればわらべの諺にさうやよめりといふ事は、此時よりやはじまりけん。藤井博士は「葬や嫁入」と解されて居る。これはそれで解釋がつくが、一寸似た——形だけであるが——諺に夜叉がよめりといふのがある。毛吹草の世話部にも出て居り、慕聚集一「たとへなば夜叉が嫁りよけふの春、成次」(この句小町踊にも出づ)。夢見草「いつ聞くもやしやがよめりぞ時鳥、堺一武」等の實例も見るが、その意味は全く分らない。

やさが馬 この諺も合類大節用集九に「屋三馬、傳云織田信長従士梶川高盛善相馬、故非良馬二者大抵不逮屬眼矣。諺據于此」と説き、類聚名物考には「或云夜叉は鬼神の名なり、その夜叉が馬を好む故、夜叉鬼の馬見し如くといふなり」と異説をあげてあるが、どうもはつきり分らぬ。實際の用例をあげて見ると、三千風笈探「予は恥の話をぬけたる捨坊主なれば、噂

によぐれまぶれても彌三が馬見たやうの顔つきぞかし。末若葉、我常の獨吟「蚊を逃す我手ながらも打れけり、彌三が馬みた近附の顔、大雨の乞食に成つてくれの月。」銀要(享保十四)「戀はくせもの／＼は戀、水くさや城かたむいて彌三がむま。」これらによるとそれら顔して冷淡にかまへてゐる事のやうに思はれる。俚言集覽には「夜叉が馬を見たやう、ヤサガ馬ハナンタ」とだけあつて説明はない。

じやくは雨 俚言集覽には「土佐にては末は雨と云、死了るを云、寂の義か」と説いてある。實例、宵庚申下「女夫は母の機嫌顔、見れば此世の本望と思へどじやくは雨とふる涙隠すぞ哀れなる。」田村將軍初觀音「あひの土山あら金の刑部山國、悪事をたくむ天罰にて、じやくは雨にて討たるゝなり。」蝶番(享保十六)「うき世かな、死の字嫌ひも寂は雨。」江戸大坂通し馬「齋食の秋はさびしき松の聲、じやくは雨ぢやと草の庵の」等は皆まさに「最後は死だ」の意であるが、なほ汎く「結局は破綻に終る」といふやうな意にも用ひ

てゐる。寶船「見たやうな、怪氣いさかひ寂は雨」の如きはそれであらう。なほ安永四年の「新口花笑顔」に「手前此頃眼が悪いさうな、ちつとはいゝやうかな。見やれおへないぜ、大きなくされよ、この眼でいくらの方がひか知れない。まあそれ見てくりやれ、なんとこれではおれもじやくは雨だらうよ」もやはりその意で、これによつて江戸後期までも用ひられてゐた言葉である事が分る。それから西鶴の大矢數に「又醫者かへて雲の行末、すいは雨とは思へ共爰に花」とあるのは末の訛りであらうか。削かけ（正徳三）とらへてゐて、じやくはきぶねとてようまで」のじやくも末はの意であらう。

すしひく 世話重寶記（元祿八）「鮮引といふ事は昔嵯峨天皇さがへ行幸の時供御をまいりし時、その役にもあらぬ人のさし出て御膳の鮮を引きける事あり。これよりものにさし出て恥辱をとるを鮮引とはいふなり。」この語他に所見がないが、俚言集覽に「すしひき、遠江方言に喧嘩争鬪の時惡徒を牽する者を云。喧嘩のス

シヒキなど云」とあるのは元來同語ではなからうか。又按ずるに世話重寶記の語源説などは、勿論あてにはならないので、スデヒクの訛ではなからうか。スデヒクは芭蕉の句にも「盛なる梅にす手引風もがな」續山井）とあり、咲分五人娘一に「三人共に身が貰うた。崗がかういひかゝつて、遂に是まで素手引た事がないぜひ貰はんといひかゝれば」等とあるやうに、手を出してそのまゝ得る所なく引込ませる事である。續無名抄、世話字盡には「赤手引」とかいてある。とにかくスシヒクは何だか方言に残つてゐさうだ。

すをかふ 同じく世話重寶記には「醜を乞ふ」として論語の微生高の故事に附會し、「すべて先にかまはぬをこなたよりしかける事を醜をこふといふ事これより始まれり」と説いてゐる。倭訓栞の説などもこれから出たのであらうが、勿論この語源説は信ぜられない——俚言集覽でもすでにその事は疑つてゐる。——これは諺語大辭典の説や近松語彙のそびをかふの條で言及して居る通り、やはり賺すとしやれて言つたものだらう。

實例、娥歌加留多三「そばから喧嘩のすを乞ふ。是堪忍のせごしなる。」銀要（享保十四）「わきからくわきの方から、りんきまでうばが酔をかふめうがさま。」國姓爺後日合戦「明朝の事かまふまいと思ふ所、うぬが方から酔をかうて御無用な奴等」等。

だいらぶしん 當麻中將姫（院本）一「爰をどこちやと思ふ。御公家様の御所ならずや。さるによつてだいらぶしんといふ世話を思ひわざとぐにやぐしてゐたり。」この諺他に所見なし。地方にでも残つて居はしまさか。

【追記】○白から杵までの用例として、正徳二年刊雜俳集「さすの神子」に「どうもいはれぬく、念へとは白から杵よ若しゆさま」とあるのに氣づいた。これで意味の輪廓だけはぼんやり分つたやうな氣もするが、なほ明確に知りたいものだ。

アマンシヤクメ——南關高山方言考

男の子供の極めていたづら盛りで著にもに棒もかゝらぬといふ様なのを、「こげなアマンシヤクメは仕様が無と評する。今ひとつ昔のいたづら神でこの名を帯びたものも有ると傳へて居る私が十二三の折、大豆引きを命ぜられて畑にゆき、一反位の畑の大豆を一人で引いて夕方歸つたり、母は豆の刺がさして手が痛むだらうと慰めてから御咄をしてきかした。——昔々、五穀は稻も粟も皆んな根元から稻になつてズツト實がついてゐた。所があはれ神様が出て来て、根から上の方に掛けて實をすごきとつて、上だけ少し残して「上の方だけに實がなれ」といつた。それ以來五穀は先きの方だけに穂がつくやうになつた。所が、その神様は大豆の所に來て「こいつもだ」と言つて大豆の實をすこいて取らうとした。所が大粒の刺で手に怪我をした。すると案外弱蟲と見えてその實をすこくのを止めて仕舞つた。それで大豆は今でも根元から實がなるやうになつた。その神様はアマンシヤクメといふ名であつた。

鹽尻卷九十七にはアマノジャコと出てゐる。記紀にはアマノザコとある。之は天探女の訛りだとあるから、この訛つた詞か或は本の詞かゝら來たのであらう。（野村傳四）